
戦争加害の展示を考える

— 飯田市平和祈念館 731 部隊パネル削除問題をめぐって —

末永 恵子

福島県立医科大学講師

1 章 はじめに—飯田市平和祈念館の展示をめぐる波紋

飯田市平和祈念館は、「平和資料を通して戦時下の悲惨で過酷な状況を学ぶとともに、当地域の満蒙開拓の歴史を始めとした内外の『戦争の惨禍』の真実から、一人ひとりが『平和とは何か、そのために何をすべきか、何ができるのか』を考え、次世代に平和の大切さを語り継ぐ」といった趣旨のもと、2022（令和4）年5月に設立された。戦争の記憶を継承し、平和について学ぶ拠点が新たに整備されたことは、快挙と言えよう。しかし、現在、飯田市平和祈念館の展示をめぐり波紋が広がっている。

それは、祈念館を所管する飯田市教育委員会（以下、市教委）が、原稿段階では存在していた731部隊の概要や元部隊員の証言を含む戦争加害のパネルを開館直前に展示から外した事実が報道されたことがきっかけであった。

本稿では、この問題の経緯と現時点（2023年9月25日）での論点を整理し、それを通して戦争加害の展示のあり方について考えたい。この問題は、削除された戦争加害の中でも特に731部隊が大きな比重を占めていたため、「飯田市平和祈念館731部隊パネル削除問題」と題して考察することとした。その際、同じ飯田・下伊那地域に設立された平和博物館である満蒙開拓平和記念館との比較を行う。比較を通じて、本問題の特徴や論点をより明確にできると考えている。

2 章 パネル削除後の動き

飯田市平和祈念館の展示パネルの原稿を作成した民間有志の団体「平和資料収集委員会」によれば、削除されたのは731部隊だけでなく、南京における虐殺、平岡ダムと飯島発電所建設への中国人・朝鮮人の強制連行といった加害を記したパネルであったという³⁾。なかでも731部隊に関するパネルについては、すべて削除となった。ただし、地元出身の元731隊員が持ち帰った医療器具と医学書は、展示スペース内のガラスケースに陳列された。したがって、その由来を示す説明や持ち帰った部隊員の証言が一切添えられることなく展示品だけが存在するという状態となった。つまり、展示品と731部隊との関係は不明瞭なままであった。

この不自然な展示に対して、「平和資料収集委員会」のメンバーはもちろん見学者からも批判の声が飯田市に寄せられた。それを受けて市教委は、「祈念館の展示及び活用について幅広い市民の意見を聞くことを目的⁴⁾」とした「飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会」を設置した⁵⁾。この委員会は、パネル内容を最終的に決める意思決定機関ではないので、委員会の意見が実際の展示に反映されるという保証は必ずしもない。他方で、原稿削除に疑問を持つ、飯田市民を中心とする有志が集まり、「飯田市平和祈念館を考える会」を立ち上げ、削除されたパネルの展示を求めて、現在講演活動やニュースレターの発行などの運動を展開している。

そうした動きの影響もあって、2023（令和5）年9月1日ようやく教育委員会は731部隊の解説パネルだけは掲示するようになった。しかし、元部隊員の証言については展示していない。現在、「飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会」は計3回の会議を開いているが、今後も継続して審議する予定であるという（2023年9月25日現在）⁶⁾。

他方で、戦争加害に関するパネルを開館直前に展示から外した市教委の行為については、その当否を問われることなく、「飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会」の議論からほぼ抜け落ち、今後展示内容をどうするかという課題に論点がすり替えられている。市教委が、原稿執筆主体の「平和資料収集委員会」と対話を経ずに独断で戦争加害のテーマを削除した動機や経緯については、不問に付されたままである。

しかし、市教委による加害に関する戦争展示の削除は、一自治体による一過性の限定的な問題ではなく、従軍慰安婦、関東大震災における朝鮮人虐殺、佐渡金山における朝鮮人強制労働などの史実を意図的に否定する歴史否定論（歴史修正主義）の動きとして位置づけられるだろう。また、パネル作成者との熟議を経ずに削除する方法は、表現の自由への認識を欠いており、言論および表現の自由に対する脅威であり、また他の戦争の加害に関する展示に委縮効果をもたらす危険性がある。

公共空間における戦争展示は、さまざまな事情をもつ当事者が関わる場合も多く、また属性の異なる多様な見学者が接する性質上、相当な配慮が求められる。兼清順子は、「人類の負の遺産である戦争や虐殺を扱う展示では、歴史を的確に、資料の情報を正確に伝えるとともに、当事者やその周辺の人々の心情、また、それらに触れる来館者の心情にも配慮しながら展示を構成することが求められる」と述べている⁷⁾。そうした配慮を払いつつも過度な委縮に陥らない展示を追究する必要がある。

3章 平和祈念館設置の経緯

ここで戦争展示の背景となる祈念館の前史をふり返りたい。そこで、「飯田市平和祈念館の構想はいかに始まり、どのような経過をたどって実現したのか」という経緯を、2023年1月29日開催の「飯田市平和祈念館を考える結成集会」において配布された吉沢章氏作成の資料によってたどる。

祈念館構想の濫觴は、1991（平成3）年8月に飯田・伊那地区で開催された第1回「平和のための信州・戦争展」にあった。「平和の尊さと戦争の悲惨さを語り継ぐ」ことを目的としたこの戦争展では、市民有志が主体となって作成したパネル展示や戦争体験者を招いた集会が行われ、好評を博した。入場者数は4日間で2,685名。会場で戦争展実行委員会が実施したアンケートによると、そのうちの64パーセントが常設の平和祈念館の設置を希望すると回答していた。

そこで、このアンケート結果をもとに戦争展の実行委員会は飯田市長や教育長に対して要請や陳情を重ねた。その結果、ついに2000年の飯田市議会において「平和祈念館設置についての請願」が全会一致で採択された。草の根の市民運動が、10年越しで市議会を動かしたのである。

翌年には、「平和のための信州・戦争展」実行委員会のメンバーが加わる市民有志による「平和資料保存収集に向けた懇話会設置準備会」（のち「平和資料収集委員会」に改称、事務局は市教育委員会）が発足し、資料の収集・保存と並行して展示の準備を進めていった。つまり、祈念館の展示は、教育委員会と市民有志が連携する企画として発足したのである。

そして、2003年に飯田市平和祈念館資料室（以下、資料室）が竜丘公民館に設置され、資料を収蔵保管する環境が整えられた。資料室は、2015年に飯田市中央公民館の4階に移転するが、展示スペースも備わっており、祈念館のプレ展示ともいべき戦争展示が行われるようになった。ここで展示されたパネルには、731部隊の細菌兵器の研究開発、非人道的な人体実験、細菌戦といった事実に加え、県

内出身の元隊員の証言もあった。また、展示と同内容のパンフレットを見学者に配布している。つまり、祈念館のオープン前に資料室において加害をふくめた戦争展が公的になされていたのである。

こうした資料館における展示に対して市民は好意的であった。その端的な表れが、戦争体験者や遺族の意思による戦争関係資料の資料室への寄贈・寄託である。2003年時点でわずか70点に過ぎなかった資料は、2023年1月には約1,800点にのぼるに至っている。これら戦争体験者ゆかりの品々こそ、飯田・下伊那地域の人々の戦争経験を語る独自の資料であった。

加えて精力的に行われたのが、戦争体験の聞き取り調査である。その証言を集めた『戦争をした国—アジア・太平洋戦争の証言と伝言@信州—』（平和のための信州・戦争展長野県連絡センター編、川辺書林、2015年）は、「延べ700名の証言からセレクトした39編」からなっている。市民有志が膨大な聞き取り調査を行い、その記録を蓄積して来たのである。このように地元の戦争資料と聞き取り調査の記録を歴史叙述の基盤として、戦争の記憶の継承が進められてきたことを強調しておきたい。

「平和資料保存収集に向けた懇話会設置準備会」は、2008年に「平和資料収集委員会」に改称したが、市民有志が無償で資料の収集・保存・調査を行うこと自体に変更はなく、祈念館の開設準備のための作業を継続した。なお、前述した「平和のための信州・戦争展」は、1991年の発足以来、毎年長野県内各地において持ち回りで開催され、2023年11月に34回目を迎える。この「平和のための信州・戦争展」開催と祈念館の展示準備は、車の両輪のごとく進められた。

そして、展示の準備がラストスパートに入った2020年1月以降は、「平和資料収集委員会」のメンバーは毎週集まって資料整理やパネル原稿を作成した。第1回の戦争展から30年余、「平和祈念館設置についての請願」の採択から20年余、市民のねばり強い歩みによって、市民による常設の戦争展示が、正式公開の時を迎えようとしていた。

ところが、開館直前になって「平和資料収集委員

会」は教育委員会から731部隊等の加害の歴史は展示できないと通知されたのだった。

4章 展示パネルの削除

2022年5月、JR飯田線の飯田駅前の複合施設「丘の上結いスクエア」3階に祈念館が開館した。しかし、先述したように原稿段階では存在した731部隊の説明や元部隊員の証言、南京虐殺、ダム・発電所での強制労働に関する加害の歴史はそこにはなかった。

開館後に行われた市教委の説明では、「731部隊に関しては他の公共施設での展示の前例が見当たらず、部隊の説明等については高次の研究検討を要するものであり、どのような解説がふさわしいかについての判断は難しかった」、また「政府が731部隊の存在は認めながらも細菌戦をしたという公文書は発見されていないとしている」ことなどが理由として述べられている⁸⁾。

祈念館の準備を有志と一体で進めてきたはずの市教委は、なぜ、オープン間際になってこのような措置をとったのかが問題のポイントであろう。2003年以来資料室で展示してきた731部隊を含むパネルを「前例が見当たらず」という理由で否定するのは、これまでの経過からも無理がある。また、祈念館構想からその実現に至るまでに約30年が経過しており、市教委と「平和資料収集委員会」とが開館直前まで内容について意見交換をする時間が十分確保できなかったとは考え難い。つまり、市教委が挙げた理由とは市教委がこれまでに一度も示したことがなかった見解であり、いわば後付けされたものである。したがって、開館直前になってパネル削除の通知が行われたのは、外部の要因によるのが妥当であろう。

では、市教委のあわただしい方向転換は、いずからか圧力があつたのか、それとも何らかの意向を忖度したのか。誰がどのような意思決定をもとに削除を行ったのか、その経緯を明らかにすることが必要である。そうしたプロセスの開示があつてははじめ

て、突然の削除という問題の性質が明らかになるはずである。だが、議論は、なぜ展示パネルが削除されたのかを問う方向には進まず、「飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会」が設置されることによって、今後の展示のあり方に論点がすり替えられてしまったのである。

5章 731部隊と歴史否定論

さて、731部隊のパネルの削除理由に教育委員会は、731に関する史実の真偽と政府見解のあり方を挙げていた。では、今回の問題は、そうした史実について問う歴史論争に還元すべきものであろうか。私は、今回の議論は歴史論争に該当しないものであると考える。なぜなら、731部隊の存在は疑いようのない史実であり、その存在に疑念をはさむ歴史否定論は、科学的叙述に値しない政治的言説だからである。

「満洲国」のハルビン郊外に細菌兵器開発等を目的とした軍事研究所として日本陸軍の731部隊が存在し、そこで中国人捕虜などに対して生体実験をして殺害していたこと、その被害者数は3,000名を越えること、実戦使用された細菌兵器により被害者が生まれたこと、といった基本的事実は、もはや学術的に争う余地はない⁹⁾。むしろ、学術的に確定した事実を根拠もなく否定する言説に対して、躍起になって学術的に議論しようとする、結果的に学術論争に値しないものを学術的に横並びであるかのように位置づけしまう危険性がある。そうすれば、安直な「両論併記」に道を開きかねないのである¹⁰⁾。

市教委がこうした歴史否定論に影響を受けた可能性は少なからずあるだろう。今回の介入の説明理由に「政府が731部隊の存在は認めながらも細菌戦をしたという公文書は発見されていないとしている」ことを掲げていた。これは、実証性を重視する姿勢を装いながら、細菌戦を裏付ける複数の史料を確認もせず、実際は政府見解だけをなぞって弁明しているにすぎない。このような説明は、裏を返せば政府の意向に沿った見解しか認めない偏狭性を示

しており、広くは政府見解の強制に通じる可能性がある。

政府見解に全面依存することがいかに危険でかつ滑稽であるかは、例えば2023年の5月23日の参院内閣委員会で立憲民主党の杉尾秀哉氏の質問に対する谷公一国家公安委員長の答弁によく示されている。杉尾氏が、関東大震災の際に虐殺された人の遺骨の隠蔽に触れた朝鮮総督府警務局の文書の写し(原文書は国立国会図書館に所蔵)を目の前で示しつつ、虐殺の関連記録の精査を求めたのに対し、谷氏は「政府内に事実関係を把握できる記録が見当たらない」と述べ、精査しない意向を表明したのである。共同通信は、「公文書あるのに記録なし? 政府、虐殺巡り評価避ける」の見出しでこれを報じている¹¹⁾。記録がないというのは明らかな虚偽答弁であり、調査もせず、事実に向き会わず、責任も明確にしないと宣言したに等しい。こうした答弁に依拠する限り、正確な叙述は不可能であるばかりでなく、ゆくゆくは戦争加害の忘却に荷担することになってしまう。

6章 元731部隊員の証言

加えて歴史否定論の問題として、戦争責任を告白した複数の長野県出身の731部隊員の名誉と尊厳を否定していることを指摘しておきたい。現在も証言のパネルは削除されたままであるが、証言記録は文字資料に勝るとも劣らない歴史叙述としての表現力がある。まして、祈念館には部隊員の持ち帰った証拠品があり、世界で唯一現存するこの物証と証言が相まってこそ説得力は増す。

731部隊の記憶は部隊員にとって思い出したくないものであり、それを他人に話すことは心理的苦痛を伴うだろう。したがって、証言とは自分のなかに抱えこんだ葛藤を克服し、勇気を出して絞りだされた告白なのである。

まさにそのような証言を取っていたのが、今回削除された展示パネル原稿であった。それは長野県内出身の731部隊の下級隊員4人の証言で、いずれ

も体験しなければ知り得ない情報で信憑性の高いものである。彼らは、部隊長の石井四郎より下された命令「731部隊のことは口外するな、公職につくな、互いに連絡をとり合うな」を長年忠実に守り、軍人恩給も申請せず、公職どころか民間企業に対してすら求職できなかった。ずっと息をひそめて生活していたのである。しかし、長い時を経てその彼らは沈黙を破った。その理由について、元部隊員の故胡桃沢正邦氏（1913（大正2）～93（平成5）年）と、元少年隊員で現在も証言活動を行っている清水英男氏（1930（昭和5）年生まれ）を例に見てみよう。

まず、胡桃沢氏は長野県南部、遠山谷の山奥で農業を営み、731部隊のことは家族にも知らせず墓場まで持っていくと決めていた。しかし、晩年になって告白を決意する。その気持ちに変化した理由を次のように語っている。

私は300体のマルタを生体解剖した。人間にはできません。このことを、戦争を知らない子供たちに、若い人達に、聞かせたかった。私のやったことは間違いだった。二度とやってはならない¹²⁾。

胡桃沢氏は自分の所業を、人間にあるまじき行為であり間違いだったと総括した。そして、事実を伝えることで、次世代の人々が二度と繰り返すことのないように希望したのであった。なお、祈念館のガラスケースに陳列されているのが、胡桃沢氏が部隊で使った人体解剖用具と医学教科書である。

また、14歳で入隊した清水英男氏は、敗戦の際に証拠隠滅のため抹殺された捕虜の遺体処理を行わされた。戦後は部隊員であったことを隠すため就職できず、父のやっていた大工仕事をしていた。しかも、経歴が公表できないことによって建築士の資格取得に困難をきわめ、仕事に不利な条件が長年続いた。そうした深い痛みを通して自己凝視を深め、「犠牲に成られた方々のご冥福をお祈りするとともに、二度と戦争を起こさないことを祈り続けたい」、「戦争が始まれば犠牲になるのは罪のない一般の人たちなのです」と述べている¹³⁾。深い内省を伴っ

た言葉は迫力がある。

このように731部隊における自分の戦争責任について証言したのは、次世代の人々に二度と自分のような思いをしてほしくないとの想いからであった。

しかし、こうした証言を行ったのは、胡桃沢氏や清水氏のような下級隊員がほとんどであった。いっぽう、高位の軍医や技師たちは、責任を問われることなく、また自己を真摯に省みることなくこの問題から逃れ続け、高い地位と名誉を得ていた。この不公正・不平等・不条理はあまりにも大きい。

戦後、社会的に高い地位についた731部隊の研究者たちは、事実を隠蔽した。いっぽう、公職にも就けず世に埋もれていた下級隊員は、真摯な反省に基づく証言をした。日米両国によってひた隠しに隠された731部隊の実態解明に貢献したのは、この下級隊員だったのである。

くり返しになるが、戦争の現実を証言することは、同時に思い出したくない自分の過去をたどり、自己と真摯に向き合う営みである。証言の展示パネルは、地元の元下級隊員たちが苦しみや葛藤のなかから、勇気をもって戦争の記憶を次世代に伝えようとしたものである。この重さを再確認したい。

7章 戦争の現実を語り継ぐ

祈念館設立の趣旨文の冒頭には、「戦争の悲惨さや、平和の大切さを学び、戦争の現実を語り継ぐことにより、平和な社会が続くことを切望する、多くの市民の願いによって開館されました」（強調は著者による）とある。

アジア・太平洋戦争を侵略戦争の要素抜きに総括することは全くの無理筋である以上、加害をこの戦争の記憶から排除することはできない。ごく単純化して言えば、被害と加害の両面を記憶として継承することが「戦争の現実」を語り継ぐことの基本条件であろう。祈念館は、この両面を見学者に提示することによってこそ、戦争とは何かを考える機会を提供する場となるのである。

今、加害の歴史への言及を、負の面ばかりを強調

し日本を貶める「自虐史観」とレッテル張りして封殺する風潮がある。その中で誹謗中傷を回避すべく自主規制を行っているのは、ひとり飯田市教委に限定されることではないだろう。

当り障りのないように、批判が出そうなものについて、あらかじめ選別し削除する、そうした付度による自主規制は、社会的に表面化しにくい。しかし、今回は完成したパネル原稿の削除といういわば力業で規制を強行しようとしたがゆえに、可視化されたといえる。これを不問に付せば、公的施設が表現の自主性・自律性を自ら放棄したことにならないだろうか。自主規制は、個別の展示を越えて他の表現分野でも委縮効果を発揮するようになるだろう。公的展示の委縮は、社会において言論および表現の自由が静かに侵食される憂慮すべき現実である。

そして、飯田市のパネル削除という自主規制に目をつぶることは、祈念館設立の趣旨である「戦争の現実を語り継ぐ」精神に相いれないことである。祈念館の「戦争の現実を語り継ぐ」精神を支えているのは、前述した市民の市民による市民のための展示をめざす自主性にある。市民の願いによって構想が始まり、内容も他からの借り物でなく地域独自の歴史を地元の資料を使いつつ、地域の歴史展示を行う自主性とエネルギーは、優れた特色として特筆されるべきものである。

とりわけ、自治体の展示施設に関して設置から準備にいたるまで、市民がここまで主体的に関わる例は希少であり、貴重である。現在、展示の多くが学芸員、キュレーター、研究者、広告代理店などにゆだねられがちだからである。地域の文化事業であるにもかかわらず、行政がブランディングの名目で著名人に監修を依頼したり、広告代理店へ外注したりする例が少なくない。その一方でこの祈念館の展示は、資料収集から体験者の聞き取り、そして原稿執筆まで市民の手で行われた。そこには、地域文化の底力と市民の戦争の歴史に対する想いがある。

8章 満蒙開拓平和記念館との比較

そうした市民の想いは、飯田・下伊那地域の人々が被った戦争の不条理と無関係ではありまいだろう。長野県は全国最多の満蒙開拓団を送り出した県であり、なかでも飯田・下伊那地域の送出数は県全体の4分の1を占める8,389人であった。そのなかで日本に帰還できたのは半数の4,205人のみとなっている¹⁴⁾。残りの方々には、敗戦時の開拓団の壊滅と逃避行中における死亡、行方不明、シベリア抑留、残留孤児・残留婦人という惨劇が襲った。戦争のひずみが突出した形で集中したのが、飯田・下伊那地域であったのである。

こうした歴史をもつ飯田・下伊那地域には、ほかにもうひとつ平和博物館がある。それは、2013年(平成25年)4月、阿智村(飯田市に隣接)に開館した民間設立の満蒙開拓平和記念館である。

この記念館は、満蒙開拓に特化した唯一の博物館で、その事業目的を「日中双方を含め、多くの犠牲者を出した満蒙開拓の史実を通じて、戦争の悲惨さ、平和の尊さを学び、次世代に語り継ぐと共に国内外に向けた平和発信拠点とする」と唱っている¹⁵⁾。飯田市平和祈念館の趣旨とも通底しており、飯田市ではこの二つの平和博物館を小中学校の平和学習で活用することを奨励している(具体的には入館料の全額負担や、学校からの移動手段的費用支援など¹⁶⁾)。

飯田市平和祈念館と満蒙開拓平和記念館は、前者が自治体による設立なのに対し、後者は民間による設立であること、また、前者が先の戦争についての総合的な展示であるのに対して、後者は満蒙開拓に特化した博物館という違いはある。しかし、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶという趣旨は通底しており、平和博物館の特性について考察するためにも、両者の比較を行いたい。

まず、満蒙開拓平和記念館の設立の経緯と運営について触れておきたい。館長である寺沢秀文の論文「語り継ぐ『満蒙開拓』の史実—『満蒙開拓平和記念館』の建設実現まで—¹⁷⁾」によると、設立の前史には、地元の長野県日中友好協会と飯田日中友好協

会による中国残留孤児等の帰国支援、そして、元開拓団員ら約60名で結成された「満州開拓語り部の会」による毎年20回を超えるの学校などでの講演といった地道な取り組みがあったという。そうした継続した活動の中で、満蒙開拓に関する資料の収集と保存がなされ、史実を語り継ぐための拠点となる満蒙開拓に特化した資料館の設置が望まれるようになったのであった。一時は、構想の途上にあった飯田市平和祈念館への資料の委託も考えられたが、当時平和祈念館構想に進展が見られないことに加え、「平和というテーマの中では『満蒙開拓』もそのうちのごく一部としてしか扱われず全体の中に埋没してしまい、十分には周知してもらえないのではという危惧」もあった。そのため、「ならば我々の手で満蒙開拓に特化した記念館を全国で最も多く開拓団を送出したこの地に立てよう」と、飯田日中友好協会が第44回定期大会（2006年（平成18）年）で設置を決議したのである。この企画に対して地域の平和団体、行政、教育界が賛同、協力し準備が進められた結果、開館が実現した。運営は、入館料と寄付に頼る民間博物館ではあるが、市町村がサポートする自治体版協力会員制度を整備し、また県内外からの見学や修学旅行も積極的に受け入れている。同記念館は、自治体の協力を得ながらも民間で設立運営している。この点は、飯田市立の飯田市平和祈念館との大きな違いである。

次に、加害の史実への姿勢である。前掲論文で寺沢は、「開拓団の皆さんの苦難、思いや汗、涙も語り継いでいくも、満蒙開拓は侵略の荷担でもあったという事実もまた語り継いでいかななくてはならない¹⁸⁾」と書いている。国策に応じて中国東北部に渡り、「満洲国」滅亡と同時に「棄民」された開拓民は、国策の被害者であると同時に外国への侵略者すなわち加害者でもあった。この被害と加害の両面が存在することこそ、戦後生き延びた者が否応なく向き合わざるを得ない厳然たる歴史であるという認識に立っている。そこに加害を糊塗する姿勢は見られない。その点は、731部隊、南京虐殺、中国人・朝鮮人強制連行のパネルを削除した飯田市平和祈念館の対応とは相違する。

さらに、こうした不都合な史実を含んだ戦争の記憶は、記念館で定期的開催される「語り部」定期講話の「語り」を通して継承が図られている。開拓民は満洲からの逃避行の末に着の身着のまま日本に辿りついた。当然のことながら、文献資料やモノ資料は多くない。そうであるがゆえに、体験者の「語り」が記憶の継承には絶対に必要であり、その「語り」が有効なことは、先述の「満州開拓語り部の会」の活発な講演活動からも明らかである。深い思いを込めた体験者の「語り」すなわち証言は、歴史の記憶の重要な伝達方法であり、この記念館の活動の核心なのである。この点は、元731部隊員の証言パネルを削除した飯田市平和祈念館の対応とは異なるものがある。

さらに注目したいのは、中国の現地（旧満洲）への配慮である。前掲寺沢論文は、「我々が建設構想当初から最も注意を払っているのは、満洲開拓の舞台となった中国現地の人々の気持ちや意見であることは言うまでもない」と明言している¹⁹⁾。これは、同館が国内の意見に無頓着なことを示しているわけではもちろんない。国内だけに注意を払うのではなく侵略された側の視点に立ち、記念館が「旧満洲や満蒙開拓をいたづらに美化したり、正当化しようとするものではなく、歴史への反省を含めて、満蒙開拓を通じて平和の尊さ、戦争の悲惨さを語り継いでいく施設であること」を中国側に理解してもらえよう配慮しているのである。実際に中国大使館訪ねて記念館の趣旨を説明したところ、大使館側は理解を示し激励さえしたという²⁰⁾。このように被害を受けた相手に対して配慮することは、対話と歴史の相互理解の促進を可能にするであろう。果たして731部隊のパネルを削除した当事者に、侵略された側の心情を顧みる機会があったのだろうか。

以上、飯田市平和祈念館と満蒙開拓平和記念館の特性を比較してまとめると、①加害の史実への向き合い方、②「語り」（＝証言）の位置づけ方、③被害の側への配慮の有無に違いがあることが明らかとなった。上記の比較検討から見てきたのは、平和博物館がどのような姿勢で戦争の被害と加害に向き合い、被害を受けた側に対していかに配慮して発信

することができるかが問われている、ということであろう。

9. おわりに——今後の戦争展示に向けて

これまで見てきたように、満蒙開拓平和記念館の取り組みを含め、飯田・下伊那地域では、人々が体験した戦争の記憶を継承する努力が積み重ねられてきた。

飯田市平和祈念館の開設に向けても市民による戦争資料収集や聞き取り調査、常設の祈念館設置請願、毎年の戦争展開催、展示パネル原稿の作成といった長い道のりがあった。その成果として提出された展示パネル原稿が部分的に削除された経緯について、市教委はまだ説明していない。その説明責任は果たされるべきである。

その上で今後の展示に向けた真の対話は可能になるであろう。戦争加害に関する資料と証言を市民に公開し、学習会等で市民とともに研究することが祈念館をますます意義あるものとしていくことになるだろう。そのように、収集資料や証言を社会教育の資源として活用することこそ、誇るべき文化事業のあり方なのではないだろうか。

【注】

- 1) 飯田市平和祈念館の Web サイト <https://www.city.iida.lg.jp/site/chiikuryoku/heiwa-chiiku.html> (最終閲覧日 2023 年 9 月 23 日)
- 2) 「731 部隊元隊員の証言、飯田市平和祈念館が展示せず 市教委〈事実関係に議論〉」信濃毎日新聞、2022 年 8 月 17 日。「飯田市平和祈念館〈731 部隊〉どう伝える」NHK 長野放送局、2023 年 3 月 16 日、<https://www.nhk.or.jp/nagano/lreport/article/000/61/> (最終閲覧日 2023 年 9 月 25 日) など、各報道機関よりニュースとして報道された。
- 3) 2023 年 1 月 29 日開催の「飯田市平和祈念館を考える結成集会」において配布された吉沢章氏作成の発表資料による。
- 4) 第 1 回飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会会議資料 <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/60391.pdf> (最終閲覧日 2023 年 9 月 25 日)
- 5) 第 1 回飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会議事録 <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/60390.pdf> (最終閲覧日 2023 年 9 月 25 日)
- 6) 飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会については、その会議録と会議資料が飯田市の Web サイトに公開されている
- 7) 兼清順子「人類の負の遺産を展示する博物館—ロンドンにある 2 つのホロコースト展示—」『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』第 19 号、2018 年。
- 8) 「731 部隊の証言展示取りやめ パネル展示予定だった宮田村の清水さん『これでは伝わらない』」、『信濃毎日新聞』、2022 年 8 月 17 日。
- 9) 常石敬一『医学者たちの組織犯罪』(朝日文庫、1999 年)、同『731 部隊全史』(高文研、2022 年)、松村高夫ほか『戦争と疫病』(本の友社、1997 年) など実証的研究は多数あり、貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』(吉川弘文館、2012 年、376-378) にも 731 部隊の項目が掲載されている。
- 10) 武井彩佳「歴史否定論と陰謀論」『世界』第 961 号、2022 年、138 頁。
- 11) 「公文書あるのに記録なし? 政府、虐殺巡り評価避ける」共同通信 7/17 (月) <https://nordot.app/1053568310388966213?c=768367547562557440> (最終閲覧日 2023 年 9 月 23 日)
- 12) 1991 年 8 月 11 日、第 1 回「平和のための信州・戦争展」での証言。
- 13) 2023 年 1 月 29 日「飯田市平和祈念館を考える結成集会」における清水氏の特別講演。
- 14) 「長野県満蒙開拓団・旧都市別一覧表」満蒙開拓平和記念館による作成資料。
- 15) 「満蒙開拓平和記念館」>「記念館概要」<https://www.manmoukinenkan.com/about-us/> (最終閲覧日 2023 年 12 月 22 日)
- 16) 「飯田市平和祈念館及び平和学習推進のための支援について」<https://www.city.iida.lg.jp/site/chiikuryoku/heiwa-chiiku.html> (最終閲覧日 2023 年 12 月 22 日)
- 17) 寺沢秀文「語り継ぐ『満蒙開拓』の史実—『満蒙開拓平和記念館』の建設実現まで—」『信濃』第 65 巻 3 号、2013 年、201-223 頁。
- 18) 前掲寺沢論文『信濃』第 65 巻 3 号、2013 年、212 頁。
- 19) 前掲寺沢論文『信濃』第 65 巻 3 号、2013 年、213 頁。
- 20) 前掲寺沢論文『信濃』第 65 巻 3 号、2013 年、213 頁。